覺如上人假名聖教用語の研究（二）

藤谷一海

四、假名聖教に於ける覺師の教義とその用語

一、覺師の教義概觀

人生れて思想あり。その思想たるや年齢及び教養と共に發達發展する。いかに發達したる思想と雖も之を表現せずしては他人に傳ふる事能はず。言語は實にこの思想を他人に傳ふる爲の最も勝れたる表現法である。然るにこの言語も時間と空間との爲に制限せられる。いかなる能辯なる言語の所有者も、その遠く處を異にし、遠く時代を距てたる者に如何なる言語を以てか之を傳へんや。文字は實にこの缺陷を補はんが爲の使命を以て生れたるものである。

既に文字は言語の標幟であり、言語は思想の表現であり、思想は又その人の人格である。否その人自身である。その言語及び文字は社會の習慣約束のもとに成立してゐるものなれば、世の變遷と共に、その言語及び文字も變遷することがある。思想は又一つの流れである。故にこの思想の流れと之を表現する言語及び文字とは常に深い關係下に置かれる。

遠く教の源を釋尊に發し、三國七高僧の御胸を流れて我が宗祖の御胸の中に注がれ、やがて又その後の各師へと波

打つた彌陀他力の淨土教思想はその時々の社會の言語及び文字を以て强くその社會へと呼びかけられたのである。世はなべて移り變る。そこに生れる人々は又異つた個性を持つて生れて來てゐる。そこに流れて來た淨土教の本來の思想に變りはなくとも、その時代の人々の個性の上にいかに反映しいかなる色に輝くかは一樣ではない。それらの人々に依つて輝き出された思想が、時代を背景としてのいかなる言語を以て表現せられたか、それらを盛り込んだ言語の中に、いかなるその人の思想教義が見得られるか、これその時代々々の各師の教義と用語との研究の關心事でなければならない。

親鸞聖人一代の教義眞宗を傳承して、之を更に後世に彰述されたる覺如上人の教義がいかなるものであり、それが更に後世眞宗教義發展の契機としていかなる役割をなしたであらうか。勿論宗祖親鸞の教義をそのまゝ傳承されたる覺師である以上、そこに特別に覺師の教義など云ふべき特種のものが存在し得る筈がないとも考へられる。されど人各々個性あり、又時代を離れての存在の不可能なる以上、何人たりと雖も時代人たることを無視することは出來ない。

覺師の出世は宗祖の滅後程遠からずと雖も世は鎌倉より足利への轉期に當り、教界亦多事なる時なり。そこで時代人としての覺師の上に如何に親鸞聖人の教が領け込まれ、そうして又それが宣布せられるに當つて如何なる形式に於て、即ちどんな用語を以て之を表現されたか、そうしてその用語の語義が如何なるものであつたか、之を窺ふ上に一應覺師の教義を概觀せなければならぬ。

覺如上人の教義に於て特に注意すべきは、

一、信因稱報

二、平生業成

の教義であり、更に之が徹底に於て、

三、宿善と善知識

四、門下の邪執破斥

五、機法一體說の止揚

等である。今は古來の說を參酌して大體この五に分けて見たのであるが、之は又別の立場から破邪と顯正の二大部門に分つて見ることも出來ると思ふ。卽ち上の第四の如きは專ら破邪の立場であり、一と二とは宗祖の教義を宣揚せんとする顯正の立場にして、第五の機法一體說の如きは、當時教界の內外に傳へられた機法一體の說の邪義を誡めて機法一體と云ふ事の正當なる意義を傳へんとせられたるものにして、破邪顯正何れとも見られる。次に聊か上に並べたる順を逐ふてそれが覺師の御著述の上にあらはれたる跡をもたづね、宗祖より傳承されたるこれらの教義が、いかに覺師自身のものとして領會せられそれが宣布せられるに當つていかなる用語を多く用ゐたまひしかを研到し、更に次には項を改めてそれら用語の語義に就ても檢討を試みんとするものである。

一、信因稱報

宗祖の眞宗を相承したまへる覺師の敎化は、この信心正因稱名報恩の語に盡きるとも云ふべきである。覺師一代の聖敎夥多ありと雖も、此の信因稱報の宗義の發揚に他ならずして、卽ち一念南無と歸命する信心のところに往生の業事成辨し、その後の終生の稱名を以て報謝の經營と訓へたまへるものこれである。その最も代表的の文と見るべきも

のは、かの『口傳鈔』三卷を述し終りてその總結の文に云く、

一念無上の佛智をもて凡夫往生の極促とし一形憶念の名願をもて佛恩報盡の經營とすべしとつたふるものなり

と。これ『口傳鈔』全卷の大旨たるのみならず、實に上人畢生の教義としての宣布はこの趣旨に他ならず。而して鮮やかに一念の信心と多念の稱名とを區別して教へたまふもの、これ實に當時元祖門下の異流にあつて、或は多念の稱名を以て元祖法然の正流を傳ふるものとし、或は一念を以て往生業成すればその後は別に稱名するに及ばずとする偏計に對して、或は我が門内にあつても日頃の念佛を以て往生の正因なりと計らひつのるもの、或は一念を以て事足れりとして殊更に多念を嫌ふもの等に對して、覺師の嚴かなる訓教でなければならない。されば覺師はそれらに對して同じく『口傳鈔』(下左二十)に、

一念も多念もともに往生のための正因たるやうにこゝろえみだす條すこぶる經釋に違せるもの歟。

或は又同じく『口傳鈔』(下右二二)にも、

上盡一形の多念も宗の本意とおもひてそれにかなはざらん機のすてがてらの一念とこゝろうる歟

と強く破して偖て次に、

一念をもては往生治定の時尅とさだめていのちのぶれば自然と多念にをよぶ道理をあかせり

とて、往生の業事成辨は信の一念にあり、その後の多念の稱名は報謝の念佛なることを明にしらしめ給へるものである。これ卽ち覺師がものせられたる宗祖の『傳繪記』に於ても屢〻述べられてゐるやうに、元祖の念佛爲本の宗旨を領けられたる宗祖の念佛が、稱名の遍數によるものに非ずして偏へに如來佛智より賜はる一念の信心に據るものなるこ

とを顯はさんとせられたものである。

『口傳鈔』に斯く述べらるゝのみならず、『改邪鈔』に凡夫往生の得否は乃至一念發起の時分なりと(末卷五左)說くもの、『執持鈔』の中に、名號を執持々念するところに往生の業事成辨することを說く(十左)、(十三右)もの、『本願鈔』に於て成就の文の信心歡喜も卽得往生も住不退轉も、「きくところにて往生さだまるべきによりて經釋ともにきゝて一念せよとすゝめたまへり」(三左)とて、往生の因果の利益を聞の一字に攝めて釋せらるゝも、『願々鈔』に於て、十一・十二・十三・十七・十八・の五願を釋せらるゝや最後の十八願に至りて、「おほよそ四十八願ひろしといへどもこの願ひとり生因たり」(五左)と、凡べて之を十八願に攝め、更にその成就の文に結歸して聞の字と至心廻向を釋せらるゝや、聞く一念の處に往生の因果を廻向せられて生業成辨することを明されるもの、『最要鈔』に最要の本願第十八願とその成就の文を擧げ、その私釋に至りて成就の文の信心歡喜と聞其名號とを釋して信心の體を示しつゝ「よくきくところにて往生の心行を獲得する」ことを示されたる等、共に皆一念の信心に往生の業事成辨する故にその後の稱名を報恩謝德の營みなりと訓へたまふものに他ならず。故に『最要鈔』の末尾には、

信心歡喜乃至一念、卽得往生の義治定ののちの稱名は佛恩報謝のためなりと。その他この趣旨を訓へたまふもの、

『口傳鈔』下十右　同二五右

『本願鈔』四右　同五右

等に於て懇切に示し給へり。こゝに覺師一代の、顯正門の教義の骨子知るべきである。

飜つてこの覺師の信因稱報の義を宗祖の上に窺ふに、信心爲本を標榜したまへる眞宗に於て信心正因たることは云ふまでもなく、その稱名報恩の義を宗祖の上に窺ふに既に宗祖にありても『正信偈』には

唯能く常に如來の號を稱へて應さに大悲弘誓の恩を報ずべし

と宣ひ、『末燈鈔』慶信房の消息に、

佛恩のふかき師主の恩德のうれしさ報謝のためにたゝ御名を稱ふるばかりにて日の所作とす

とあるを認可したまひ、『歎異鈔』には、

一生のあひだまうすところの念佛はみなことゞ〳〵く如來大悲の恩を報じ德を謝すと思ふべきなり（二四右）

ともあり、又『高僧和讃』にも

佛恩ふかくおもひつゝつねに彌陀を念ずべし

とも歌嘆したまへるものである。されば覺師が『口傳鈔』に高田の覺信房の往生の際の稱名の心事を引いて、更に宗祖の意を明らかにせられたるは飽まで眞宗獨特の教としてこれを高調し給ひたのである。

されど宗祖にありては、未だ念佛を以て名號と區別せられたる報謝の行とのみはせられずして、寧ろ多く往生の大行とせられた。『行卷』大行釋には、

大行者則稱二無碍光如來名一

と。こゝでは念佛卽ち正業である。然るに覺師は飽くまで念佛を信後の報恩行とせらるゝと同時に、信ずるとは名號を信ずることであるとせられたのである。

かくて念佛名號未分の宗祖を繼承して、兩者を所信と信後とに分けられたる事、すでに先輩も注意を向けられたるやうに、これ當時教界の内外に對する覺師の高き見解に緣るものと見ねばなるまい。曾て高く挑けられたる法然聖人の念佛爲本の法燈は彼の徒輩をして多念の稱名を以て往生の業因と計らひ募ることに墮せしめたのではなかつたか。こゝに覺師は、元祖法然を繼承して明に眞假を批判辨別せられし宗祖の精神を、更に一層闡明ならしむる爲に名號を所信とし、その口稱三昧を以て往生の正因とするものとの混同を、殊更に避けんとせられし覺師の深慮によるものであらう。

二、平生業成の義

衆生往生の得否は信一念の時尅の極速にある。これ淨土異流に對して淨土眞宗の立場である。この思想の一層明にせられたるものは恐らく覺師の平生業成不來迎の說であらう。

卽ち聞卽信の一念に往生は治定して心は不退失往生を遂ぐ。臨終正念を期せず、來迎を待つことなしと。何を以ての故に。平生信の一念に往生の業事成辨するが故であると。これ明かに來迎を願ひ臨終正念を祈る淨土異流と異る點である。

この思想は、かの願成就の文「信心歡喜乃至卽得往生住不退轉」の文に據られての宗祖の『一念多念文意』に於ける十一願成就の文に就て現生正定聚の御釋、『正信偈』に於ける憶念彌陀佛本願自然卽時入必定等の御釋に依られるものにして、宗祖のこの御釋たるや、遠くは龍樹の『易行品』の偈、「人能念是佛無量力功德卽時入必定」等の指南に據られたるものと見られるが、近くは元祖門下にあつて隨聞隨錄したまへるものと云はれる『愚禿鈔』上九右に、

信ニ受本願一前念命終ナリ　即人ニ正定聚之數一文　即得往生後念即生ナリ　即時入ニ必定一文　又名ニ必定菩薩一文

等と見え、又『和語燈』二六等にも一聲平生の念佛のところに攝取來迎の事見えて、之に依りて思ふに既に元祖にこの平生業成の思想のありしことを拒むわけにはゆかぬ。しかれば宗祖のこの思想は龍樹元祖の指南に依るものと云ふことが出來る。殊に宗祖にありては、『末燈鈔』の初めに「來迎は諸行往生にあり云々」とも見えてゐて、殊更に覺師に至つて新しく說き創められた教義ではないが、特に平生業成の名目を以て益々この義を强く主張せられたるものは實に覺師である。而して覺師がこの義を特に强く主張せられる所以はこれ、當時淨土異流に於て臨終正念に住して來迎を期待する思想の愈々瀰漫せるに依るものであらう。然らば何故に彼ら異流の徒は臨終正念に住して來迎を期せねばならなかつたか、それはすでに宗祖も喝破せられたやうに自力の行者なるからである。さるにても自力の行者は何故に臨終に來迎を期するのであらうか、それは平生の行業が自力なるが故に一生往生に一定の安心を得るに由がない、臨終に至つて佛の來迎てふ證明を得て始めて往生に間違ないと安心を得るものである。故に臨終來迎こそ彼等をして往生に安心を得させる唯一のものである。これ彼の徒を驅つて滔々とこの思想を追はしめた所以であらう。

次に覺師に於ける平生業成の語及びその思想の見えてゐる個所二三を擧ぐれば、

即得往生住不退轉の道理を善知識にあふて聞持する平生のきざみに治定するあひだこの穢體亡失せずといへども業事成辨すれば體失せずして往生すとはいはるゝ歟（『口傳』中右一八）

されば平生のとき一念往生治定のうへの佛恩報謝の多念の稱名とならふところ（『口傳』下右二二）

しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまれるものなり（『執持』右一二）

その他この思想の見えてゐる個所は、

『口傳鈔』下一〇右

『改邪鈔』本三左　同本二左　同末二一左

『執持鈔』一〇左　同一一右　同一二右　同一三右

『本願鈔』三左　同三左　同四右

『最要鈔』三左　同四左　同五右　等

これらは何れも臨終と云はず平生と云はず、聞信一念の立どころに往生の業事成辨する卽得往生の義所謂平生業成を語るものである。

覺師に於けるこの平生業成の文字は、宗祖に於ける住正定聚と共に信心の現在に於ける德益を語るものである。然しすでに平生業成と云へる以上、一方では中心は無論來世にあることを顯はすと共に、他方では往生の行業は現世に於て既に完成せられて終うてゐることを意味するのである。それ故平生業成の文字は「必ず滅度に至るべく現世に正定聚に住す」と云ふことになるのである。かくて住正定聚と云ふことは平生業成の文字となつて一層安心を語る適切なる語となつたのである。

斯くて『末燈鈔』初めの「眞實信心の行人は攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住すこのゆへに臨終まつことなし來迎たのむことなし信心さだまるとき往生また定るなり」と云ふ不來迎の宗祖の御信念は、當然そのまゝ覺師によりて傳承され、それが又蓮師に來つてこの二師を領けて「不來迎の談平生業成の義」として宣布されるやうになつたのであ

る。

以上、信因稱報平生業成の二つを以て覺師の教義は略〻盡されたとも見られるが、更に之が徹底に於て、宿善と善知識、門下邪執の破斥、機法一體說の止揚等の義が展開されたものと見られる。

三、宿善と善知識

衆生往生の眞因は信の一念にあり、その信の一念は本願の生起本末を聞信するところにあることを說くもの、これ全く元祖以來宗祖の教義を覺師が傳承されたる所のものであるが、更にその本願聞信に就て過去の宿善と現前の善知識の教へとを强く主張せられたるものは覺師である。この事は既に宗祖にありても、「適獲行信遠慶宿緣」てふ『教行信證』總序の文や、或は『末燈鈔』攝取不捨章の「釋迦如來彌陀佛われらが慈悲の父母にてさま〻の方便にてわれらが無上の信心をばひらきおこさせたまふと候へばまことの信心のさだまることは釋迦彌陀の御はからひとみえて候」とあるもの、その他『御消息集』九左等にも見えてゐるが、それらは我らが信を獲るには過去のさま〻の宿緣が加はり居る事故、獲信の行者は先づそれを喜ぶべきことを訓へられたるものである。

然るに覺師にありては、それが更に强く主張せられて信心獲得と否とは一にかゝつてこの宿緣開發と否とに緣るとまで、過去の宿善無宿善が强く叫ばれるやうになつた。

されどいかに宿善開發すべき機であつても善知識の勸めに遇はずばまさしく宿善開發して獲信の榮を得ない。

しかるに宿善開發する機のしるしには善知識にあふて開悟せらるゝとき一念疑惑を生ぜざるなり（『口傳鈔』本六左）

願力不思議の佛智をさづくる善知識の實語を領解せずんば往生不可なり（『改邪鈔』本三右）

他力不思議の信心を善知識ありてつたへときてさづくるを行者きゝうるによりて文のごとく一念歡喜のおもひおこる（『本願鈔』二左）

これらは最もその事を如實に語るものであるが、斯る意味の文字は覺師の著の到るところに現れてゐる。こゝに善知識と云ふものゝ、獲信に就ての最も重用なる地位と教權とを占むる根據がある。蓋し所化にとりては獲信を以て偏へに師教の恩致なりとする事は人法不二なる生命を體得するを本義とする信仰にとりては自然のことである。それ故宗祖に於かせられても、御自身の獲信に於てはその師法然聖人の教を「よき人の仰せ」と宣ひてその値遇を喜びたまひ、又聖人その人を勢至の化現と讃じ、或は彌陀の化身として仰ぎかしづき讃嘆なされたことはあつたが、未だ善知識を以て教權教條として示されたことはなかつた。こゝにも宗祖より覺師への教義の展開が認められる。而してそれは又やがて蓮師に至りて五重の義御文の訓教への契機ともなるものである。

四、門下邪執の破斥

内に眞實の信心が蓄へられ、口に報恩の稱名が稱へられる程の者ならば、必ずやその日常の振舞に於てもその相は見ゆるべきである。獲信の行者正定聚不退轉の地位にあるからは、如何なる卑劣の行ひをしても可なりなど云ふ事は斷じて眞宗の教義の許さゞる所である。「これに依りて眞實信心を獲得したる人は必ず口にもいだし又色にもそのすがたは見ゆるなり」とは御文に於ける強き蓮師の御訓戒であつたが、これ獨り蓮師のときに限ることにあらず。覺師の『改邪鈔』が門下に於ける幾多の邪執を指摘して之を誡めてゐられるが、たとへそこには當時分裂狀態にあつた眞宗教團をして統一への覺師の意趣もあつたとは云へ、畢竟ずるにそれらは門弟たちの、内に眞實の信心が缺けたるが爲で

あつて、斯る邪執の徒は早くその迷執を離れて眞實の信心に歸すべきであると教へたまへるものに他ならない。これ卽ち上に擧げたる信因稱報、平生業成の教義の徹底である。

『改邪鈔』には幾多門下の邪執が誡められてゐるが、その全篇二十章の中、凡そ(一)教義に關するもの、(二)儀式に關するもの、(三)門弟に關するものゝ三部に分けることが出來る。その所屬と章名を擧ぐれば、

(一)教義に關するもの。

(15)專修の名言　(17)因果撥無　(18)智識歸命　(19)一益法門

(二)儀式に關するもの。

(2)繪系圖　(3)服裝　(11)彼岸會　(12)道場　(14)聲明　(16)葬禮　(20)本廟

(三)門弟に關するもの。

(1)名帳　(4)弟子　(5)同行勸發　(6)本尊聖教の授受　(7)聖教の名字　(8)同行の離着　(10)在俗の法名等。

これら幾多門下の邪執を指摘して誡められたことは勿論內に眞實の信心を蓄へることを强く訓へられた事に他ならないが、一方これは外に向つては門下の他流に紛るゝことを警戒し給ひつゝ、內に向つては本願寺眞宗の構成統一への意圖に出でられたるものと見られるのである。何となれば當時關東その他各地に於て有力なる遺弟たちは各〻眞宗の教團を自立せんとしつゝあつた時代であるから。

五、機法一體說の止揚

覺師に於てこの機法一體の用語の見ゆるところは『願々鈔』である。第十三願の私釋の下に、「おほよそこの第十二第十三の願成就せずばたとひ念佛往生の本願成就して生因たるべしといふとも念佛衆生の往生のゝぞみを達しがたし」とてその次に、

そのゆへは光明無量の願にこたへて信心歡喜乃至一念の機を攝益したまふその機はまた遍照の光明にはぐゝまれて信心歡喜すれば機法一體になりて能照所照ふたつなるにこたへどもまたく不二なるべし

と。一念南無と歸命する信心歡喜の機に光明攝取の法の利益のあらはるゝそこに機法一體を語つてゐられる。覺師に於てこの思想の見えたるもの猶他にもあれど、その機法一體の語の正しく見えたるはこの所のみ。斯くてこの機法一體の名目を今家に於て用ゐ給ひしは覺師を以て濫觴とし、爾來存師は『六要鈔』一九右、二七左、四一九右、『存覺法語』二四右等。又蓮師は『御文』三ノ七、四ノ八、四ノ十一、四ノ十四通、『御一代聞書』百右その他『帖外御文』等次第に多く用ゐられるやうになつた。又蓮師もよく依用したまひたと云はれる『安心決定鈔』には最も多くこの用語が見えてゐる。

この機法一體に就ては、惠空師は『叢林集』、『異集決疑篇』上、『安心決定鈔翼註』等に、この義の本據と云ふべき者は大觀の經、善導の釋等にして、隨つて祖釋の上にも充分其の意は見ゆるとて一々その文義を指し、名の本據は正しく今の『願々鈔』を始めとする、故にこれは他山の名目に非ずして今家の法門たりと云ふ意を述べてゐられる。

とまれこの名目を覺師以前より古く用ゐられたるは西山流である。かの證空の著作をはじめ同門流の章疏には可なりこの語が見受けられる。それらの語が凡べて同義であるとも見えないが、その二三のものを左に擧ぐれば、

證空の『安心鈔』及び『他筆鈔』

四代相承中第二西山善峯上人の下、

顯意の『竹林鈔』

等、これらを參酌しつゝ今家に於ても機法一體の義を講ぜられたるもの甚だ多く、

安心決定鈔翼註　惠空師　眞宗全書

安心決定鈔讃記　香嚴院　刊本

安心決定鈔記　皆往院　眞宗大系

願々鈔講義　易行院　寫本

願々鈔講義　圓乘院　眞宗全書

願々鈔丙戌錄　開悟院　眞宗大系

等、この二鈔に就てのみにても可なり多くの諸師の講錄あり。その他この機法一體の義に就てその多少なりとも說かざる學者なきが如し。

今西山上人の『略安心鈔』に就て機法一體の說を窺ふに、

南無阿彌陀佛と稱する心を正因正定の業と名く、此の南無の心は我等がほとけを憑むこころなり、阿彌陀佛とは憑む心を彼の佛の攝し給ふ他力不思議の行體也　されば我心を南無と云ひ彼の佛の我を攝し給ふをば阿彌陀といふ彼此一つに成りあひたる姿が卽ち佛にて御座す處を南無阿彌陀佛と申すなり

とありて、これがこの派の機法一體である。此の如く南無の二字と阿彌陀佛の四字とは密接な關係下にはあるが、南

無は飽まで衆生の心であり佛は阿彌陀佛である。それで六字を果號と云ひながら正しく佛は四字とも云はれないことはないことゝなる。こゝに二字四字共に全く他力回向であると談る眞宗との相違を見らるべきである。

而して今家諸師の指摘する西山家機法一體等の義は多くこれら『安心鈔』等の義を更に發展せしめたる『四代相承』『竹林鈔』等の義に依るものの如くであつて、かの易行院の『願々鈔』第八會に、

時にこの機法一體と云ふ名目はもと西山家に談ずる處の名目也西山に於ては此機法一體を他力の體としてさかんにこれを推したてゝ宗義を談ずること也その機法一體の機は衆生の往生、法は彌陀の正覺にして彌陀は衆生のために願をおこし行をはげまして十劫正覺の時往生と正覺とを一體に御成就なされたる故彌陀の正覺の外に衆生の往生なく衆生の往生の外に彌陀の正覺なし彌陀の正覺は衆生往生の全體にして衆生は十劫正覺の時既に往生し終て佛と衆生と一體になりてある處が機法一體なりと立つるなりかくの如く機法一體を佛體の上に立てゝ而して名體不二なる故に名號も亦機法一體なりと談ずるなり。これは御文に仰せらるゝ處の賴む機と助け給ふ法との機法一體の名號と云ふ時とは大違なり西山義は機法一體は卽ち生佛一體のことにして彌陀とや云はん衆生とや云はん生佛一體なる處也、この謂れを知らなんだ故今日まで迷ふたれどもこの謂れを知りたる時本の正覺の一念に還り生佛一如に適ふと談ずること也

等とあるも亦然りである。證空のものでは「觀經他筆鈔」にすでに略〻この如き義みえ、顯意の「竹林鈔」またこれをうけついでゐる。

斯くて當流の機法一體の義は右に指摘せられたる西山義の如く十劫の昔衆生の往生が定りたりと云ふに非ずして、

南無と賴むものを阿彌陀佛の助けたまふ機法一體の六字の謂れなれば、衆生の賴まぬ先、十劫の昔に往生の定る道理なし。南無と歸命して信心歡喜する一念に往生の大益に預かる所を指して機法一體の利益の衆生に現はれたるものと云ふべきである。そこに今家と西山義との相違を見る。

而して右に述ぶる當流機法一體の義も多く之れ蓮師の御文に於けるそれにして、『願々鈔』に於ける覺師の機法一體の義は聊かこれと異るものあるを覺ゆ。卽ち前揭の如く「信心歡喜乃至一念の機を攝益したまふその機はまた遍照の光明にはぐくまれて信心歡喜すれば機法一體になりて能照所照ふたつなるにこれどもまたく不二なるべし」と。之れ『執持抄』の光明名號因緣の釋と同じく、此處も光明と信心との關係にして、言はゞ因緣和合の信心とも見るべく蓮師の所謂六字に於ける本來の一體とは多少相異あるべし。

卽ちこゝに於ては信心の機と光明の法とに就て一體を明すのである。こゝに注意せらるべきは「機法一體になりて」とある「なりて」の語である。「なりて」とは本來別なものが一つになる時のことを表すに用ゐられる。今こゝは且く相に就て示されたるもので、能照の光明は十二願成就、所照の信心は十八願成就であつてそこに差別がある。然るに我らこの如來智慧の光明に照さるゝときやがて宿善開發してこの光明から智慧の信心を授けらるゝ。この智慧の信心をば又智慧の光明もて攝取せらるゝ、而ももと行者の信心も、佛の光明も智慧である。然れば能照の光明と所照の信心とはもとより一體であり、體は一にして相の二なるものが一體になること故、且く相に約して語られたるものであつて、かの「能照所照ふたつなるにこれども」とは相に約し、「またく不二なるべし」とは體に約し以て本來の一體に結歸して語られたるものと云ふべきであらう。

之を要するに覺師はかの西山の顯意等と略〻時を同じうせられたれば當時教界の内外、殊に西山に多く行はれて動〻もすれば當流の義に亂入せんとする機法一體の說を止揚して以て本宗の眞意一念歸命の弘願の信心を彰はさんと努められたるものと云ふべきであるが、かの西山教義が、その後益々展開さるゝにつれて、我が眞宗に於ても存師より蓮師に至つて、これに對抗して益々この機法一體の語義の上にも展開を見たのである。

以上大體五項に亙つて覺如上人の教義概觀をなして來た。もとよりそれは概觀に過ぎない。この他覺師に出世本懷論等なきに非ねど、未だ存師の時に至つての如く對外的に盛には述べられてはゐない。故に上の五項を以てその大體を盡すものと云ふべきである。その中前にも述べたやうに、教義の中樞は前二項であり、後の三項は前二者信因稱報平生業成の教義の徹底に過ぎない。然してその信因稱報平生業成にしても、その眼睛は信心正因の第一にあること勿論にして、佛智不思議のもよほしに信心定るとき、そこに自ら報謝の稱名が生命をついて顯はるゝこと『改邪鈔』の彼岸章に、「往生淨土の正因は安心をもて定得すべきよし釋成せらるゝ條顯然なり乃至この一念を他力より發得しぬるのちは生死の苦海をうしろになして涅槃の彼岸にいたりぬる條勿論なりこの機のうへは他力の安心よりもよほされて佛恩報謝の起行作業はせらるべきにより云々」と。以て知るべきである。

次の平生業成の義の如きも、當時異流の臨終正念往生の義の盛であつたのに對して往生の定るは臨終平生を問はず信一念のところにある事なれども、今は臨終往生の義に對して平生業成の名目を用ゐられたるもので、畢竟これ信一念の强調に過ぎない。

然れば覺如上人の教義は、之を要するに信一念の義を教へたまひたものに他ならない。而してこの事は特に覺師の

創說に非ずして既に宗祖は、「眞實信心の行人は攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住すこのゆへに臨終まつことなし來迎たのむことなし信心さだまるとき往生また定るなり」（末燈鈔）等、諸所にこの義を宣へるものにして、覺師はこれをそのまゝ相承し給へるものに過ぎざれども、宗祖以來當時に於けるまでも一念多念の異義盛なる時に對して覺師は佛智他力の一念を强張してそこに搖がぬ眞宗教義の基礎あることを宣揚したまへるものである。されば『改邪鈔』には本願の三信を成就の一念に攝めたる經釋を擧げ、その私釋に、

この文について凡夫往生の得否は乃至一念發起の時分なり乃至しかれば祖師聖人御相承弘通の一流の肝要これにありこゝを知らざるをもて他門としこれを知れるをもて御門弟のしるしとす。

と。應に知るべし、覺師の教義、聖人の御門弟と否とは一にかゝつてこの信心一つを得ると否とにあることを勸め給へるに他ならざるを。

而して若し果して覺師の教義が一念の信に極るものとすればその一念の信を現はすのに如何なる用語を多く使用したまひたか、及びその使用したまへる用語の語義如何等に就て次に檢討して見たい。（續）